

# 私有地からふたたび共有地へ

## ——タンザニア南西部シウインガ村の季節湿地の利用をめぐる合意形成——

平成 19 年編入

派遣先国：タンザニア

山本 佳奈

キーワード：牛，季節湿地，共有地，タンザニア，農地拡大

### 対象とする問題の概要

タンザニア・ムベヤ州ボジ県の南東部にひろがる高原地帯には雨季に湿原となる内陸低湿地が網目状に分布している。私はこの季節湿地に着目し，その利用形態の変遷を生態や社会環境の変化に照らしながら調査してきた。調査地域では，古くから牛は耕作や荷物の運搬などを担う労働力であり，湿地をその放牧地として利用してきた。季節湿地は，そこに生える豊富な草が家畜を維持する貴重な飼料であり，地域を統括するチーフや村評議会（村長，村行政官および 25 人の村民代表で構成）によって大切に守られてきた。ところが近年，人口増加によるアップランドの耕地不足や，生活における現金要求の高まりなどを背景として，湿地の耕地化が急速にすすみ，放牧地は大幅に縮小していった。季節湿地の耕地としての需要が高まるなか，各村では放牧地をどのように確保するかが大きな課題となっている。



写真 1 季節湿地に広がる農地  
大部分が農地化されている。

### 研究目的

季節湿地に囲まれたシウインガ村でも耕地不足は深刻な問題であった。2002 年に村評議会が井戸建設の資金を集めるためにわずかな農地しかもたない農家に季節湿地の土地を売り出した。そのことで放牧地の不足を招き，牛の所有者たちは農地化された土地をふたたび放牧地に戻そうと動きだした。そして，2002 年以降に農地化された土地のほとんどを放牧地に再転換することに成功し，今もその状態が維持されている。一度，個人の農地として私有地化されてしまった土地をふたたび放牧地という共有地（正確には季節湿地は村有地であるが，ここでは村人が共同で利用・管理するという意味で「共有地」という表現を用いる）に戻すことは簡単なことではない。この研究では，どのような過程を経てふたたび共有地が確保されたのか，またその結果を人々がどのように受けとめているのかを調査した。

## フィールドワークから得られた知見について

シウインガ村では、1980年代から季節湿地の農地化が徐々にすすんでいたが、村評議会は放牧に必要な草地を季節湿地の中に確保してきた。しかし、2002年当時の村評議会が井戸の建設費などを集めるため、放牧地として利用してきた季節湿地を売ることにした。土地不足に悩む農家はこの土地を買い、耕作をはじめた。

これに対して放牧地の縮小に危機感を抱いた M 氏とその仲間は、湿地の購入者たちを村区（村の下位の行政区分）の会議に呼び出して耕作をやめるように求めた。けれども湿地の購入者たちはこの要求を



写真2 牛耕の様子

聞き入れなかったため、M 氏らは村評議会に放牧地の返還を求めた。しかし、村評議会は湿地を売った張本人であり、購入者の肩をもって M 氏らの要求を退けた。怒った M 氏らは、湿地での耕作を妨害するために、湿地畑にわざと牛を放ってトウモロコシの葉を食べさせるといった過激な行動にでるなど、農地と放牧地の争いは徐々に激しくなっていた。

最終的に M 氏らは県庁に放牧地の返還を訴え、県から区と村あての指導書を書いてもらうことに成功した。この書簡によって村評議会はようやく放牧地の確保に動き出し、2002年以降に耕作された畑を放棄するように促した。一部の耕作者たちは、自分たちは正式な土地保有者であることを主張して耕作

を続けたが、区の裁判所でも耕作禁止の裁定が下され、最終的にはほとんどの人が農地を手放すことに合意した。

湿地耕作者の中にも牛の所有者が多く含まれており、放牧地の不足は当事者の問題として強く意識されていた。また、牛を持たない者も牛を借りて畑を耕起するのが一般的であり、彼らも放牧地の必要性をよく理解していた。個人的な利益が優先され、地域社会を支える共有地は縮小する傾向にあるが、シウインガ村では、政府の介入を通して、共有地の維持が地域全体の恒常的な利益につながることを住民が再認識し、共有資源の確保にむけて地域全体が動いた。

## 今後の展開・反省点

タンザニアの農村において、牛は私産の所持手段の一つであり、畜産物や堆肥の給源であるとともに、重要な労働力でもある。この貴重な財産を維持するために飼料が必要なのは自明であり、調査地域では季節湿地が草の供給地として共有されてきたので



写真3 耕地化された湿地が再び放牧地に戻された

ある。一方で、活発化する市場経済や人口増加のもと、不足する耕地を補うために、水の豊富な季節湿地を農地として利用したいという要求はますます高まっている。農地と放牧地をめぐる相克は、タンザニアの農村において、きわめて深刻な問題として顕在化してきている。この事例では、地域内で生じた矛盾を解決に導いたのは第三者の自治体（県）であった。個人主義が席卷するなかで、私有地を共有地に戻すのはきわめて難しい課題であろうが、自治体が客観的な立場からどのように介入していったかについての分析は、現代アフリカにおける「官の役割」のあり方を検討する上で重要なことであり、今後の課題としたい。